

As a donor conceived and a researcher.

ドナー出生者として、研究者として

Interviewee

Dr. Giselle Newton

Q. ドナーからの出生者として、また研究者としての簡単なプロフィールを教えてください。

今月（2022年11月）の下旬に博士号を授与された。博士課程での研究は、オーストラリアのドナー出生者の生活体験に焦点を当てたもの。社会記号論、社会学、メディア研究を取り入れた学際的なアプローチで、デジタル技術がドナー出生者の体験をいかに変容させ、絆を深め、戦略を練り、追跡する新しい機会を提供しているか、そしてそれがインターネット時代以前には決して不可能だったことを考察している。

博士課程に入る前、避妊に関するオンラインピアサポートに焦点を当てたプロジェクトを完了し、名誉学士号を受けた。自分の博士号のテーマに、生きた経験を取り入れることを興味深いと感じ、ドナー出生者について研究することを選んだ。研究を通して、「生きた専門知識 (lived expertise)」 (生きた経験と、根拠や法律などに関する専門家レベルの理解との組み合わせ) という概念を発展させてきた。

自分は、1990年代初頭、オーストラリアのノーザンテリトリーで出生した。両親は異性カップルで、父親が不妊だったために無料のドナープログラムを利用した。医師は匿名のドナーを選び、両親はそのことに同意の署名をした。医師は、社会的父親の身体的特徴とドナーの身体

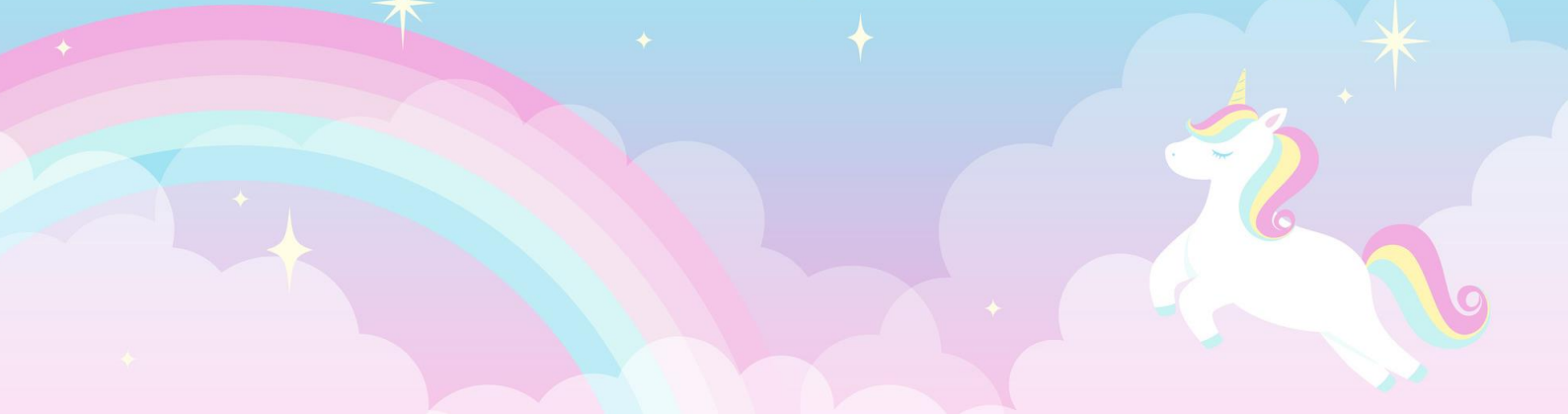
的特徴を一致させるためにドナー・マッチングを行った。

医師が秘密にするよう助言したにもかかわらず、ドナーから生まれたことを知って育った。両親は幼い頃に伝えることを選んだので、ずっと知っていた。18歳ごろから Facebook のドナー出生者のグループにアクセスするようになり、自分のような人がもっといることを知ることになった。DNA 検査を知り、ドナーきょうだいを特定することができ、その後、実際に会うことができた。誰がドナーかについて、目算はあるが、まだコンタクトを取っていない。だから、自分の DC の物語は未完成のままだ。

Q.これまで DC について研究して論文を発表されましたが、研究の方法と、わかったことについて簡単に教えてください。

博士課程を修了するまでに、6つの本の章と複数の論文を出版した。現在までに5つの論文が出版されていて、現在も1つの論文が査読中。調査方法は、全国規模のオンライン調査、半構造化インタビュー、Hansard（オーストラリア議会と委員会の公式議事録）の分析を組み合わせたマルチメソッドだ。

自分の仕事に通底しているのは、「日常的な帰属意識 (everyday belonging)」。これは、ドナーから生まれた人は、仲間との小さな瞬間や相互作用の中で、帰属意識を経験するという考え方。博士課程では、デジタル技術が“ミーム” (ユーモアや内輪のジョークを使ったもの) や“スルーシング” (追跡) の実践を通じて、それがいかに絆を深める新たな機会になっているかについて研究している。ある論文では、ドナー出生者による DNA 検査と、不妊治療の世界における医師への不信感 (記録の破壊などが原因) がどのように



代替手段への信頼を生み出すかについて研究している。

今日、ドナー出生者が集まり、国家的な調査を通じて権威に挑戦する新しい方法を模索している。例えば、オーストラリアでは、ドナー出生者が証人として名乗り出るなどして、国家的な調査が行われた。

Q. これまでに調査をしたりインタビューした中で、印象的だった人物や場面について教えてください。

例えば、ある女性は、実の母親から市販の DNA 検査を贈られたが、それが娘の DC を明らかにするかもしれないことを母親は知らなかった。その女性は、自分がドナー出生者であるということだけでなく、ドナーが誰であるかも数分のうちに知ってしまった。

また、ある参加者は、ドナーきょうだいから「私たちは異母兄弟だと思う」と言われ、「そんなはずはない」と答えたが、結局はその通りだった。このような人たちは、突然、家族の物語と遺伝の物語、そして外部者からの新しい情報をナビゲートしなければならないという難しい立場に立たされることになる。

Q. ご自身が donor conceived であるという立場性は、研究のプロセスや結果にどのような影響を及ぼしましたか？

自分もメンバーになっている Facebook グループを通じて研究参加者を募集した。そのため、募集のプロセスはより合理的で、既存の信頼関係があった。また、必ずしも自分のグループではない参加者の募集をサポートしてくれる組織とも提携するようにした（例：Rainbow Families と提携し、同性愛者の家族を募集

した）。これによって、より幅広い層の参加者を集めることができた。

参加者の何人かは個人的に知っているため、会話は弾むが、その分言いそびれてしまうこともある。そのため、参加者にレコーダーに向かって話してもらうことで、共有されている知識を確実に声にする必要があることを発見した。また、会話をリードしないように努めた。そのために、自分の話を前面に出さないようにした。自分のことではないのだから。

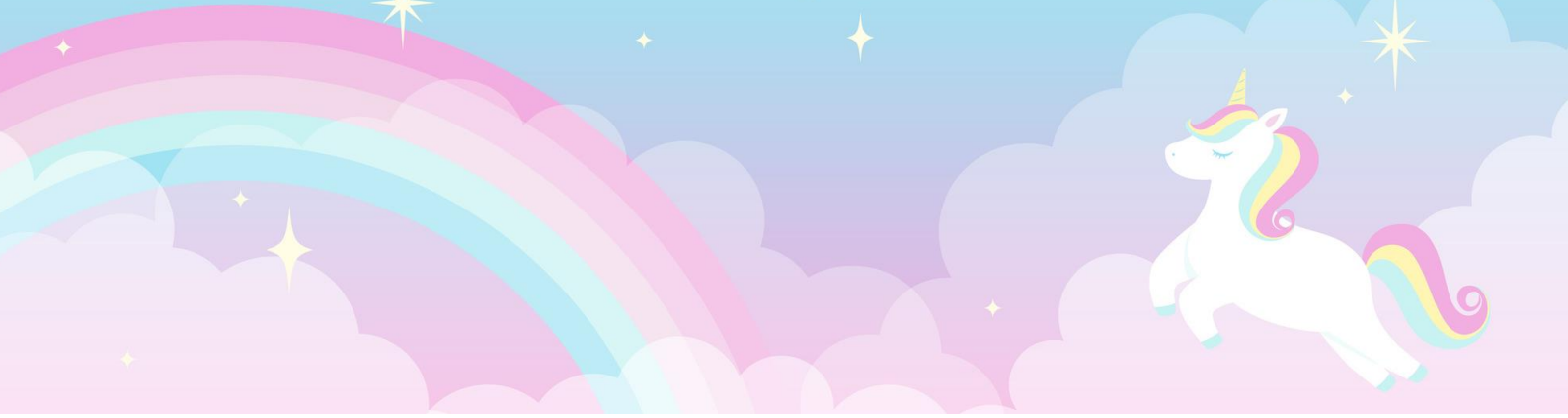
多くの文献は、ドナー出生者である研究者が自分たちの立場性を認めることが重要であることを示している。自分の場合は、DC の透明性を高めることを主張している。

Q. 多くの donor conceived たちは、ドナーを知りたいと考えているようですが、他方では、ドナーには全く興味がないという人もいます。このような違いはなぜ生じますか？

これは個人の問題であると同時に、より広範な構造的な問題でもある。法律や改革について議論するとき、たとえドナーに会いたいと思う人が少数であっても、誰もがその情報にアクセスし、希望すればコンタクトできるようにする必要があると考えている。

自分の研究は、自発的に参加した人たちを対象にしているので、その人たちがドナーの情報に興味を持ち、その情報を探していたのは当然である。全員がドナーに関する情報を求めており、かなりの割合の人がドナーやドナーきょうだいとの接触を求めていた。

また、情報を得ようとしらない人については、その人のライフコースで考える必要があると考えている。自分の研究によると、ライフステージの重要な局面で、アイデンティティに関する疑問が生じる傾向がある。たとえ興味がないと言って



いても、変わる可能性があるのだから、長期的な視点が重要だ。ドナーから出生した中高年の人たちが、自分の出自について自由に発言し、ドナーを発見できるようになったことで、DCをめぐる今後の展開について、興味深い示唆を与えてくれるだろう。

クィアな家族では、実の親ではない方を守らなければならないというプレッシャーがあるが、片親の家庭では、もう一人の親への脅威がないため、自由度が高い。ドナー出生者から、片親(遺伝的繋がりが無い方の親)が亡くなった後で、ドナーの情報を求めることを考えるかもしれない、という声を聞いたことがある。デリケートな問題だ。

Q. 近年、SNS 上でたくさんのドナー出生者が語っています。このことはどのような効果をもたらしていますか。人々の経験の多様性と普遍性について、どのように考えますか。

ドナー出生者のアイデンティティを理解する上で、ソーシャルメディアは重要な鍵を握っている。この言葉自体の歴史をたどると、人々が集団で集まることができるようになってから使われ始めたもの。インターネットへのアクセスとオンラインでの身元確認、この2つの社会的プロセスは密接に関係している。

オーストラリアで圧倒的なシェアを誇る Facebook グループは、急速に人数を増やしている。グループのメンバーは、およそ 18 歳から 55 歳までと幅広い傾向にある。意外だったのは、参加者の文化的多様性だ。自分は、DC にアクセスするのは白人のアングロサクソンがほとんどだろうと考えていたが、自分の調査によって、さまざまな背景を持つ多くの家族がマッチングを試みていることが明らかになった。

このようなスペースでは、ドナー出生者が集まり、より幅広く議論を行うことができる。また、出生者の親、ドナー出生者、ドナーを一つの空間に集めたグループもある。自分は、このようなグループに所属するドナー出生者の中には、親を「教育」する責任を感じている人がいることを論文で指摘したことがある。そして、そのために何時間も費やしているのだ。不妊治療業界は、この負担をもっと軽減すべきだ。

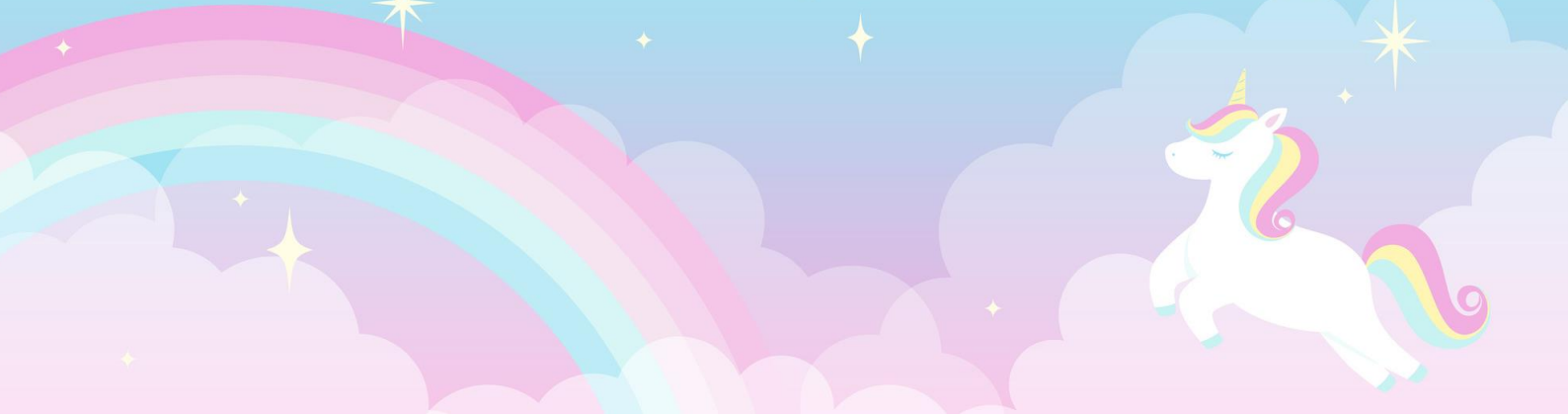
また、Netflix のドキュメンタリー番組、例えば「Our Father」によって、ドナー出生者に関する公的な対話が多くなった。このドキュメンタリーは、ドナー出生者たちを彼ら自身の生活の中で捉え、理解することに成功している。

Q. ドナー出生者が、ドナーを知りたいという気持ちは十分に理解できるものですが、一方で、あまりにも遺伝子にこだわりすぎているという見解もあります。どう思いますか？

社会的な観点からは、家族が鍵になる。これは、外見が似ていること、家族に溶け込んでいるかどうか、性格的特徴などにも結びつく。もし、自分自身のバックグラウンドについて答えが見つからなければ、集団に溶け込むことは難しい。社会科学の観点から、自分は、これは強化されないまでも、変わらないだろうと考えている。

物語が一つしかないというわけではない。私たちは、社会的な物語と遺伝的な物語の両方に基づいて、自分という人間を形成している。これらは並存している。

Q. 南オーストラリア州でもドナーの情報を電子登録する制度ができたと聞きました。DNA 検査ではドナーを発見できない人は依然とし



て、多いですか？ 公的機関とDNA検査の advantage と disadvantage は？

南オーストラリア州では、最近、登録制度ができたが、まだ作業中で、完全には運用されていない。これは正しい方向への素晴らしいステップだと考えている。例えば、ニューサウスウェールズ州にはこのような登録があるが、記録が破棄されていたり、作成されていなかったり、共有されていなかったりすると、その記録は含まれない。このことが、レジストリへの不信感を助長している。ビクトリア州はもっと成功しており、そのシステムには通知システムも含まれている。ドナーになった人は、ある年齢に達すると、レジストリに連絡して詳細を聞くようにとの手紙を郵便で受け取る。主な問題は、レジストリが実際に人々を結びつけるのに十分な情報を持っていないことが多いということ。

Direct to Consumer DNA 検査は、たとえドナーの遠い家族しか検査をしていなくても役に立つことがある。これは当初は理解されていなかった。つまり、自分では直接検査をしていない人を明らかにする可能性があり、その人の家族が不注意に「暴露」してしまうことを意味する。非常に強力な方法だが、誰にでも使えるわけではない。ドナーきょうだいの場合にはもっと難しく、直接にマッチしないとわからない。

ドナー出生者は、宙ぶらりんな状態で待たされがちである。しかし、メディアが注目するようになり、より多くの人々が名乗り出るようになった。ドナー出生者の親も（子供がすでに成人しているかどうかにかかわらず）開示する確率が高くなっている。ドナー自身も、自ら名乗り出るようになった。

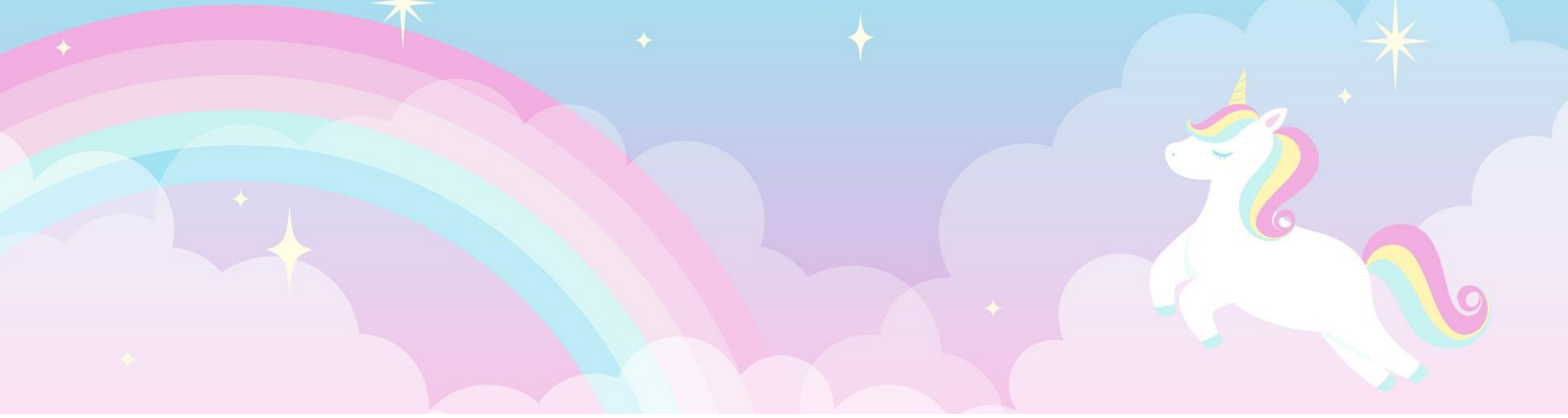
Q. 遺伝子検査で、ネガティブな経験をした人はいますか？ それはどのようなエピソードですか？

自分の研究によると、ドナー出生者は、大人になってから思いがけず、あるいは偶然に知ったとき、アイデンティティの危機を経験する傾向がある。その後、数ヶ月から数年経ってから、正確な情報を知ることによって圧倒的に安心する。多くの人にとって、両親が施術を受けた時代は、医師から秘密にすることを勧められていた。その後、親との関係を修復するために努力することも多い。家族とは、私たちを結びつける粘着性のあるものであり、私たちはこの概念を中心に社会的な世界と渡り合っているのである。

ドナー出生者の限られた選択肢を比較すると、クリニックや病院の記録にアクセスすることは、不可能ではないにしても極めて困難である。また、登録も簡単ではない。そこで、もうひとつの選択肢である DNA 検査は、比較的早く、安く、効果的で、より迅速なサービスを提供している。しかし、個人情報データを巨大企業に提供しなければならない。自分は現在、そのデータを保護するための戦略を検討しており、ドナー出生者がこれらの企業からどのように自分達のプライバシーを守っているのかを探りたい。

Q. donor conceived であることをどのようにして知りましたか。親からテリングをうけていたのでしょうか？ どのように感じましたか。

ドナー出生者としての経験は、日々変化している。この分野の専門家になったことも影響している。自分の両親は、比較的スムーズにその情報を語りに織り込んでくれた。両親はいつも、自分はとても「特別」であり、自分を産むのは難しい、などと言っていた。年齢的に適切な時期（約 8~9 歳）に、DC が実際にどの



ように行われるかを説明してくれた。いつも安心して両親に聞いていたし、大人になってからも自信を持って、さらに情報を求めている。自分が子供を欲しいと思ったとき、そのことについて考える。同様に、自分自身が病気をした時にも、ドナーに関する情報不足から、もっと深く考えるようになった。

ドナーから生まれた子どもに情報を開示しない異性愛者の親もまだいるので、多くの人にとってまだまだ困難な状況だ。

Q. ドナーやドナーきょうだいと会いましたか？ 特別な絆を感じますか？ 育ての父親と、遺伝的父親は、どのような存在ですか？

ドナーにはまだ会ったことがない。ドナーきょうだいとは断続的に接触しており、実際に会っている。一緒に育ったという共通の歴史を持たない兄弟姉妹との関係は、これから何が起こるのか、まだわからないので面白い。来年からはもっと近くに住むことになるので、関係がどのように発展していくのだろうかとも興味がある。まだきょうだいが残っていて、さらに名乗り出てくるかもしれない。

できればドナーに会いたいと思っている。ドナーが提供した西オーストラリア州で法律が変わるかどうかが、関心がある。州によって法律でアクセスできる情報が違うので、オーストラリアのドナー出生者の状況は、今のところ不平等だ。

法律がドナー出生者の権利を認め、優遇すれば、DNA検査とは別の入り口ができる。だから、自分は西オーストラリア州の法律が変わるまで待ってから（可能なら）、ドナーとコンタクトを取るつもりだ。

Q. ドナーからの出生者にとって、ドナーは、「本当の親」でしょうか、それとも自身の(遺伝的な)ルーツとして重要なのでしょうか。一定の傾向性がありますか？

自分は、使われている言葉はそれほど重要ではないと考える傾向がある。「生物学的父親」対「ドナー」対「精子供給者」（お金をもらっている場合など）など、使われる言葉はさまざま。研究のためのインタビューでは、参加者がどちらの言葉を使ってもいいように調整する。

Q. 人の個性や能力は、環境と遺伝のどちらからの影響によるものが大きいですか？ ご自身の経験から、教えてください。

このことについてはしよっちゅう考えている。ドナーに会ったことがないので、個人的には答えにくいのだが、二元的な概念で表すことは有用ではないと考えている。健康やウェルビーイングが、家族とつながっていることは、その両方を理解することがますます重要になってきているということ。まだこのことについて知ろうとしている途上だ。

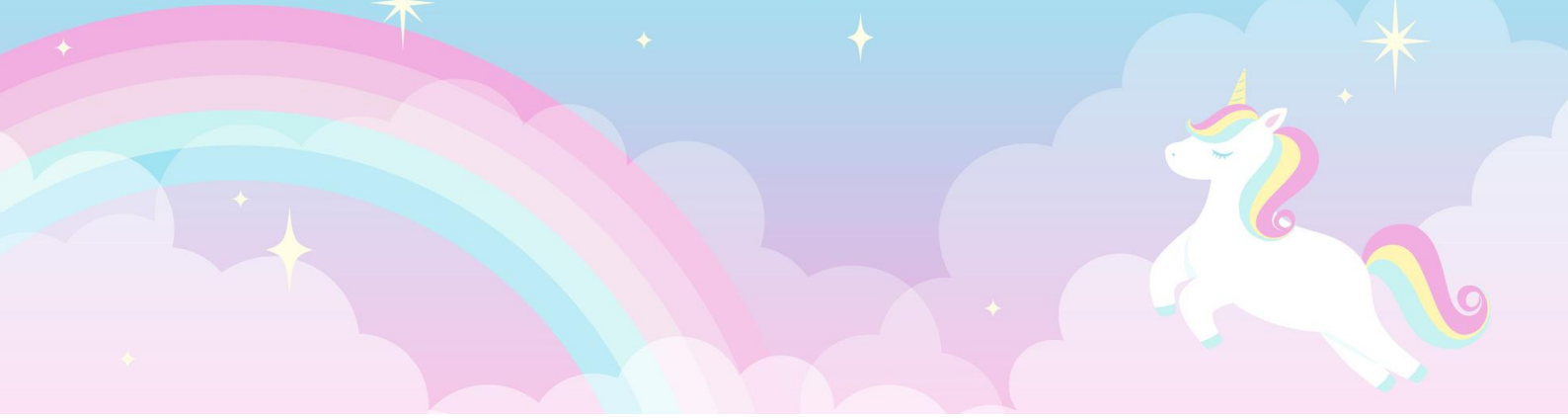
Q. 米国では、主治医の精子を使っていたというケースが多く報告されているようです。オーストラリアではどうですか？

ABCのジャーナリスト、サラ・ディングルは、このテーマについて報告し、最新のドキュメンタリーを作った。

このことについて生きた経験を持つ人に話を聞いたことはないが、このようなことがあったと聞いても、驚かない。

Q. 23andMeなどの遺伝子検査で、卵子ドナーを見つけることはできますか？

市販のDNA検査サービスは、共有DNAに基づいて人々をマッチングするの



で、父系と母系の両方の家族をマッピングすることができる。Ancestry.comは、それぞれの家系に応じてマッチングを分けることができる新機能を出したところだ。例えば、精子ドナーで妊娠した場合、実母にも検査をしてもらえば、母方のマッチングを排除し、父方のマッチングのみを行うことができる。

DNA検査は、精子提供、卵子提供の双方に対して使える。

Q.これからDCで親になろうとする人にどのようなメッセージがありますか？

これから親になろうとする人に対して、子供は自分の希望を自分ではコントロールできないものであることを認識してほしいと考えている。子供が将来望む可能性のあるすべてのケースを想定して計画を立てることが重要だ（特に、道を開いておくということに関して）。自分についての情報を提供し、将来的にコンタクトを取る可能性のあるドナーを選ぶのがベストだ。また、同じドナーから妊娠できる子どもの数に制限があること、ドナーから正確な医療情報を入手することも重要だ。

依頼親の希望について同僚と記事を書いた。依頼親と対話し、問題を議論した。依頼親が、ドナーから生まれ、成長した人の観点から書かれた情報にアクセスできるようにした。このようなことは、10～30年前にはなかった機会だ。

Q. その他、重要なこと。

DCの領域で研究を続けたいと考えている。近い将来、クイーンズランド大学でポスドクになる予定だ。

(2022年11月)

Dr. Giselle Newton [Link](#)

シドニー大学の健康社会研究センターで博士課程に在籍し、2022年に博士号を取得した。

異性カップルの両親を持ち、男性不妊のドナープログラムによって誕生した。ドナー出生者としての自身の経験を取り入れながらドナー出生者の生活体験に焦点をあてた研究をしている。

Newton G, 2023, 'On familial haunting: donor-conceived people's experiences of living with anonymity and absence', in *Donor-linked families in the digital age: Relatedness and regulation*

Newton G, 2022, 'Doing reflexivity in research on donor conception: examining moments of bonding and becoming', in *Reproductive Citizenship: Technologies, Rights and Relationships*

Newton G; Drysdale K; Zappavigna M; Newman CE, 2022, 'Truth, Proof, Sleuth: Trust in Direct-to-Consumer DNA Testing and Other Sources of Identity Information among Australian Donor-Conceived People', *Sociology*, pp. 003803852210911 – 003803852210911

Newton G; Zappavigna M; Drysdale K; Newman CE, 2022, 'More than Humor: Memes as Bonding Icons for Belonging in Donor-Conceived People', *Social Media and Society*, vol. 8, pp. 205630512110690 - 205630512110690